

2. 建設技術展2025関東 (C-Xross2025) について

2025年11月19日・20日に、日刊建設工業新聞が主催の「建設技術展2025関東」と国土交通省関東地方整備局が主催の「建設技術フォーラム」が開催された。この2つの事業を統合した愛称は「Construction Xross」（以下C-Xross）とされており、C-Xrossは、「X-Tech」を取り入れた建設技術を表したものであり、建設技術と他の産業の技術を融合させ、建設産業の一層の発展を促す取り組みを表すものとして、事業の愛称とされている。

今回が6回目の開催となり、今回のC-Xrossのテーマは「ともに創る建設の未来。」。200を超える企業・団体が最先端の技術・工法・活動等をパネルや技術展示で紹介を行った。2日間で約1.6万人来場し、過去最多人数の来場者数となった。

3. 荒川水系4事務所における広報

前述で述べた土木業界の課題から、荒川水系4事務所にて「流域治水」を効率的に進めるための「建設DX」を流域全体で推進していることを紹介するため、C-Xrossへ合同で出展することとした。

(1) 荒川水系4事務所出展する意義

荒川は上流・中流・下流で担う役割や課題は異なるものの、荒川水系4事務所は連続的につながるような取り組みを行っている。例えば、二瀬ダム管理所の3次元測量、上流河川事務所の間川流域緊急治水対策プロジェクト、中流域の調節池整備、下流河川事務所の高規格堤防や洪水浸水想定区域図など、対策内容は多岐にわたる。このように、荒川水系4事務所では、各事務所が地域特性に応じた取り組みを進めている。

これらを合同で紹介することで、来場者が荒川全体の治水の流れを一目で理解できる展示とすることを目指し、4事務所を1つの大きな流域としてストーリー性を持たせることができるような工夫を各事務所の若手職員が中心となって考えた。

(2) 展示テーマの決定とレイアウト等

a) 展示パネル内容やレイアウト

展示パネル内容は「流域治水」と「建設DX」について展示することにした。これは、荒川水系における治水対策と技術活用の取り組みを来場者が流れとして理解しやすくするためである。図-3に示すように、中央に二つのテーマの概要を説明するパネルを配置し、両サイドには各テーマの具体的取り組みをより分かりやす

く理解していただくため、各事務所での取り組みパネルを設置した。



図-3 ブース背景デザインイメージ

b) ブースタイトル

展示タイトルは、4事務所出展を機に、担当者で投票のうえ「あらかわミライノヒ」に決定した。流域治水と建設DXにより未来へ向かって変化していく荒川の姿を表現したものである。

c) 背景デザイン

来場者が直感的に展示内容を理解できるように、テーマごとに異なる背景デザインを採用した。「流域治水」では流域をイメージした曲線的なデザインを用い、「建設DX」では技術的・構造的なイメージを取り入れた。

(3) C-Xross本番に向けて取り組んだこと

a) 4事務所合同打合せ

C-Xrossに向けて7月から準備を開始し、まず4事務所出展を機に顔合わせを行った。距離的な制約から対面での調整が難しかったため、Teamsを活用して資料共有や作業状況の確認を行った。



図-4 実際の打合せ風景(Teams)

C-Xrossまで3か月を切った9月下旬には4事務所合同打合せを月に1回標準として行い、各事務所が発信していきたい内容や展示の方法、展示パネルの作成状況等を話し合った。

b) 当事務所における担当パネル作成

荒川調節池工事事務所では、流域治水パネルの一部と建設DXパネル2枚を担当した。当事務所は全国に14あるi-conモデル事務所の1つにも選ばれており、特にDXに関する取り組みを推進しているため、それらを情報発信するために「建設DX」を紹介するパネルをメインで作成した。設計段階では3次元モデルによる統合設計、施工段階では遠隔操作やドローンを活用したICT施工など、DX活用の流れが理解できるよう構成した。

c) 当日の広報活動

当日は展示ブースに3名程度配置することとし、役割分担を行いシフト制で行った。また、他事務所パネルの質問についても全担当者が対応できるよう事前に想定QAを作成するなど全関係者が他の事業の内容も含めて理解できるようにした。ブースにはパネル以外に、各事業を分かりやすくまとめた動画を再生、来場者に体験してもらうための荒川調節池VR設置、パンフレットを使用してブース前での説明を併せて実施した。



図-5 実際のブースレイアウト

4. 振り返り

(1) 反省・改善点

打合せでは、パネル内容や文章構成について各事務所のイメージや意見が合わず、議論が停滞することが多くあった。取りまとめを担っていた当事務所の担当者も、4事務所で統一した形に仕上げることの難しさを痛感した。

主な反省点は、1つ目は打合せ回数が月1回と少なかったこと、2つ目はメール中心の連絡では意思疎通が不十分で、意見交換や進捗共有が滞り、手戻りが発生したことである。

これらを改善するために、全員が揃う日を待つのではなく、「各事務所1名以上参加できる日」に合わせて週1回のWEB打合せを設定した。頻繁に顔を合わせることで担当者同士のコミュニケーションが円滑になり、

打合せの質も大きく向上した。また、個別の相談や調整も増え、事務所間での連携がより密になった。

さらに、パネル内容の検討が滞った際は、Teamsを活用して即時に状況を共有する運用に改めた。こまめな報告により課題の優先順位付けが容易となり、問題を1つずつ着実に解決することで、新たな視点や俯瞰的な考え方を得ることもつながった。

(2) C-Xross事後アンケートの実施

C-Xrossの4事務所合同出展終了後、出展内容や運営方法について担当者間でアンケートを実施した。

a) 2つのテーマ・運営についてアンケート結果

まず、展示テーマである「流域治水」と「建設DX」の評価について確認した。

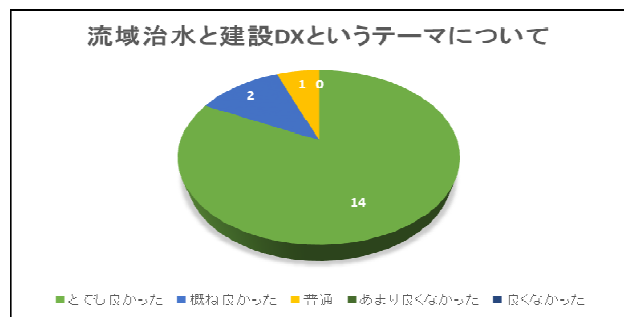


図-6 流域治水と建設DXというテーマについてのアンケート結果

国土交通省の河川分野で、重点的に取り組んでいる課題のため、また、「流域治水を効果的に実現するための建設DX」という具合に、2つのテーマがリンクしていたため。

4事務所合同で出展すること自体が流域治水を象徴しており、意味深く感じたため。

表-1 テーマについて良かった理由

半数以上が「とても良かった」と回答しており、国土交通省として推進している取り組みを分かりやすく説明することができたこと、また流域治水の加速化・深化における建設DXの重要性をPRできた点が高く評価された。

併せて、展示準備から局との調整、情報共有等の運営体制についてのアンケートを実施した。

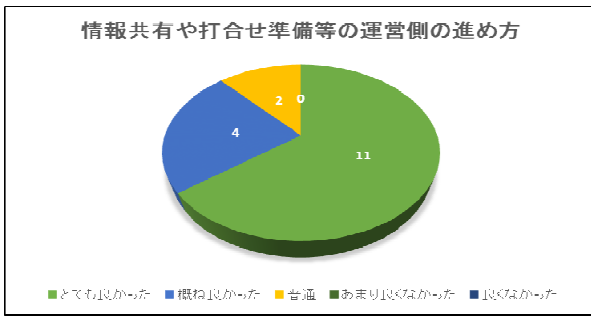


図-7 荒川調節池工事事務所における運営について

打合せが急に決まったこともあったが、来れる人で打合せが出来てよかった
短めに終わる打合せの場合は、そのことを事前にお知らせできていると日程調整等しやすいと思いました。
後半の「日程決め打ちで出席できる人だけ集まる」スタイルを、当初から採用すればなおよかったと思う。

表-2 打合せについての意見

運営に関しても半数以上が「とても良かった」と回答した。Teamsでチャットとチームとの併用が効率的であって点が評価され、特に定例化した打合せにより情報共有が円滑になった点が評価された。各事務所の作成状況の共有や方向性の確認等が高頻度で行えたことが改善につながったと言える。

b) その他のアンケート結果

上記のテーマ及び運営に関する内容に加えて、広報面についてもアンケートを実施した。具体的には当日のブースの動き方や、荒川水系4事務所が合同で出展したことに対する評価について意見を収集した。

当日の運営では、あらかじめシフトを作成していたものの、担当者が時間外でも積極的に応援に入る場面が多く見られ、ブース内の職員数が増えることがあった。この点については、各事務所の協力体制が強かった一方で、配置調整の課題も確認できた。

また、荒川水系4事務所合同での出展については、来場者に対して大きなアピール効果があったという意見が多かった。1事務所単独の取り組みとして説明する場合には、荒川全体の施策の流れが伝わりにくいという課題があるが、流域全体を1つの枠組みとして紹介することで、各事務所の取り組みがどのように繋がっているかを分かりやすく説明できたという回答が多く寄せられた。

6. まとめ・今後の展望

今回の C-Xross への出展は出展側として大きな経験と

なった。流域全体で治水を進める必要性や、その実現を支える建設 DX の取り組みを一体的に示すことで、行政として進めている施策を来場者へより分かりやすく伝えることができ、理解を深めていただけたと感じている。今回の展示内容を多くの来場者に知ってもらうことで人手不足解消や柔軟な考えの創出に帰結していきたい。



図-8 パネル説明の様子

また、準備段階では打合せ方法の工夫や、各事務所間での工夫など、広報を進めるうえで必要となる実務的な改善点も多く見つかった。そして広報業務における情報整理や発信手法の重要性を改めて認識することができた。

展望として今回の合同出展で得た知見を活かし、日常的に行っている資料作成や関係機関との協議等、多様な業務において今回の学びを反映していきたい。今後の広報業務についても見学会や SNS を活用し、目的や対象に応じた柔軟な手法を考えていきたい。また、技術的内容にとどまらず、通常業務の中で向き合っている流域治水の理念や建設 DX の価値についても住民・関係者に分かりやすく伝えていく工夫をすることで、治水事業への継続的な理解や協力がより一層得られることを期待する。

参考文献

- 1) 国土交通省関東地方整備局 荒川上流河川事務所 荒川水系と流域 (閲覧日 1月 19日)
- 2) 建設技術展 2025 開催概要 (閲覧日 1月 19日)
- 3) 日刊建設工業新聞【公式】 (@decn_nikkenko) ・ Instagram (閲覧日 1月 19日)